

## 木ぐし

くしは、整髪や髪飾りとして古代から各民族で使われてきています。わが国でも中国の影響をうけ、横ぐしが多く用いられていたことが、正倉院の御物ぎよぶつからも推測できます。

くしの素材も国や時代によって木・竹・角・貝・べつ甲・金・銀・青銅・象牙・鳥や獣物の骨などいろいろ用いられていました。

髪に飾りとしてくしを挿さすようになったのは、結髪けつぱつが流行した桃山時代からといわれています。日本髪を結うため、形もいろいろ工夫され、とかしぐしやときぐし、びん揚げぐし、すきぐしなど考案されました。

飾りぐしの素材は、江戸時代初期にべつ甲が使われ、元禄時代には梅の木を原料としたまき絵の木ぐしが流行しました。

木ぐしは「ツゲ」が最上とされていましたが、春日部の木ぐしと信州のお六ぐしは、材質も硬く歯も滑らかに仕上がるつやのよい「梅」を用いていました。他につげぐしの模造品として「黄揚きあげ」と称するものがあり、

山に自生する「梨」の木を利用したもので黄色い粉の溶液に浸してから加工したくしです。

春日部の木ぐしは、明治初期に藤塚村六軒の時田亀次郎氏が、農家の副業として始めたと伝えられています。家のわきを流れる庄内古川を利用して材料を搬入し、自宅の屋敷内に作業所を建て、農家の子息に技術を教えながら木ぐしの製造をしました。当時30人の徒弟が集まったと言われています。技術を習得した者で希望する者には自宅に材料を持ち帰って加工することを許可して生産を奨励しました。これらの製品は、全部時田家に集荷して荷車で東京市日本橋区横山町の間屋に納品していました。

また、春日部の木ぐしを紹介宣伝するために関東各地の有名な六斎市ろくさいいちなどに露店を張り、遠くは千葉県中山法華教寺や群馬県高崎まで出張していました。

二代目亀次郎氏は、先代の事業を継承し技術の改良をするとともに、これまでの足踏式のこぎりを機械化し、石油発動機を利用した動力式のこぎりを考案しました。

東武鉄道が開通すると原木や製品を鉄道輸送に切り替え、粕壁駅通り（現三菱銀行附近）に工場を設け、製

材・加工・集荷・納品の業務を行う拠点としました。こうして大正から戦前までの木ぐしの全盛期の基礎を築いたのです。

戦後は、髪型も変りブラシが普及し、くしも木よりセルロイドや合成樹脂製品の方が需要が多くなりました。現在では木ぐし製造業者はわずかに3軒となってその名残りをとどめています。

※春日部市史近世史料編Ⅲ※<sup>1</sup>の予約申込みを受付けております。

市史編さん室（電話⑥1 六四四二）※<sup>2</sup>

初出「広報かすかべ 昭和五十六年十一月」かすかべの歴史余話

※1 昭和五十七年発刊。在庫は文化財保護課（春日部市教育センター内）にお問い合わせください。

※2 掲載当時のまま作成しました。市史編さん室は春日部市教育センターで活動しております。

（※1、※2とも、平成二十八年十月現在）